わぴねす
WAPPINESS

2018 ANNUAL REPORT

インド社会を内側から変える
ーインド人ワークキャンプ、開幕ー

昨年10月に始動したインド人学生勧誘プロジェクト。これは、インド人の学生を私たちの活動に引き込み参加してもらうことが目的です。そしてついにこの春、インド人と日本人の合同ワークキャンプが初めて開催されました！

社会を変えるには

このプロジェクトを始動させたのは、現わぴねす職員の酒井美和さん。「この国を変え、ハンセン病に対する差別をなくすためには、インドに住む人々に、特に今後のインド社会を担う若い人たちにもっと現状を知ってもらわなければいけない」という彼女の想いからこのプロジェクトが始まりました。

インド人学生がワークキャンプに参加することには、他にも意味があります。日本人学生は、半年に一度、二週間という短い期間しかコロニーを訪れることができないため、コロニーの人々にとって常に身近な存在でいることができません。そして、言語の壁もあります。

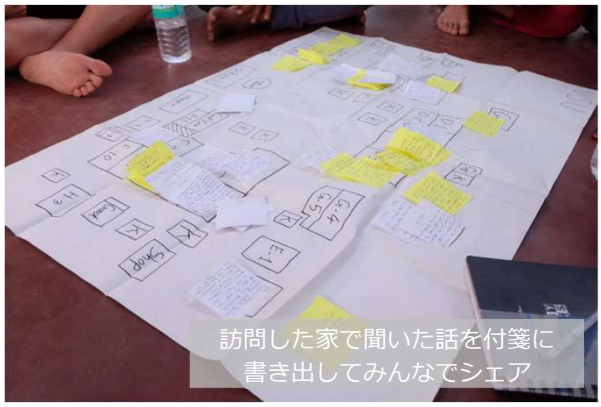
コロニーの人々のもっと近くに、いつでも頼って相談できる存在がいたのなら。そんな、コロニーの人々の日々の暮らしを見守ることのできる存在をつくりたいという狙いもありました。

このような目的のもとで動き出した本プロジェクト。活動に参加してくれる学生を募るため、西ベンガル州にあるVisva Bharati University、Bankura University、Jadavpur University、Loreto Collegeの4つの大学にて、のべ200人ほどの学生の前でハンセン病に関する知識やワークキャンプについてのプレゼンを実施しました。そのうち約25人の学生が私たちの活動に興味を示してくれ、最終的には家庭や大学の事情でキャンプに参加できなくなってしまった学生もいましたが、ついに2019年3月、2ケ所のコロニーにて、インド人学生を交えての初めてのワークキャンプが実現しました。

ついにインド人学生がコロニーへ

今回インド人学生を交えてのワークキャンプが開催されたのは、ボルドワン県にあるチャクドラコロニーと、バンクラ県にあるビシュナプールコロニーの2ケ

回復者の家を訪問し話を聞く日本人・インド人キャンパーたち


訪問した家で聞いた話を付箋に
書き出してみんなでシェア

所です。それぞれのキャンプは4日間の日程で開催され、前者にはVisva Bharati Universityから4人の女子学生が、後者にはBankura Universityから6人の男子学生が参加してくれました。

彼らは日本人学生と共にコロニーに住みこみ、回復者の方の家を訪問してその人の人生や暮らしについて話を聞いたり、啓発プログラムとしてパーティを催しコロニーの人々との交流を図りつつ、「私たちが彼らのためにできることは何か」を考えました。

はじめはコロニーの人々とも日本人学生とも距離があった彼らでしたが、生活を共にするうちに自然と距離も近くなり、ハンセン病やコロニーに対する意識にも変化が生じてきました。

”We will definitely come back.”

インド人学生たちが初めてコロニーを訪れたとき、彼らはまだハンセン病に関する知識も少なく、「ハンセン病に罹らないように何か予防が必要？」と日本人に何度も質問していました。しかし、コロニーの人々と交流しながらコロニーで生活することで、彼らのハンセン病に対する理解も深まっていきました。

「私たちの社会は、ハンセン病に罹った人たちを恐ろしく、遠ざけなければいけない存在だとしているが、全くそんなことはない。私たちは彼らのことを、自分と何ら変わらないひとりの人間として受け入れ、同じような愛と思いやりをもって接していかなければならない。そして、ハンセン病に関する誤った認識を消し去るために、私たちはもっとハンセン病やコロニーの本当の姿を知る必要がある。絶対に、またコロニーに帰ってくるね。」

これは、キャンプ終了後の彼らの言葉です。彼らの周りの人々は、ワークキャンプの前に「ハンセン病コロニーは恐ろしい場所だ。」と彼らに話しました。そのときは何も言葉を返すことができなかった彼らは今、ハンセン病とは、コロニーとはどのようなものか、その本当の姿を自信を持って伝えてくれています。

今回参加したインド人学生は、大学でソーシャルワークを専攻しています。彼らが普段学んでいる手法と、ワークキャンプによるアプローチは全く別物です。しかし彼らは「ワークキャンプのやり方だとコロニーの人々の暮らしや ”その人自身” がよく見える。大きな可能性を秘めた活動だと思う。機会があれば、またワークキャンプに参加をしたい！」と言ってくれました。このように、インド人学生にもワークキャンプのポテンシャルを実感してもらうことができ、今後もさらに彼らを活動に巻き込んでいく意義を強く感じました。

キャンプ最後の日、村人とともに
パーティを楽しんだ

目指せ、インド支部設立

インド人学生によるワークキャンプは始まったばかりです。これをたった一度の活動で終わらせるのではなく、どんどん人を巻き込み、インド人学生自身が主体性をもって活動を進められる状態を作ることが次の目標です。

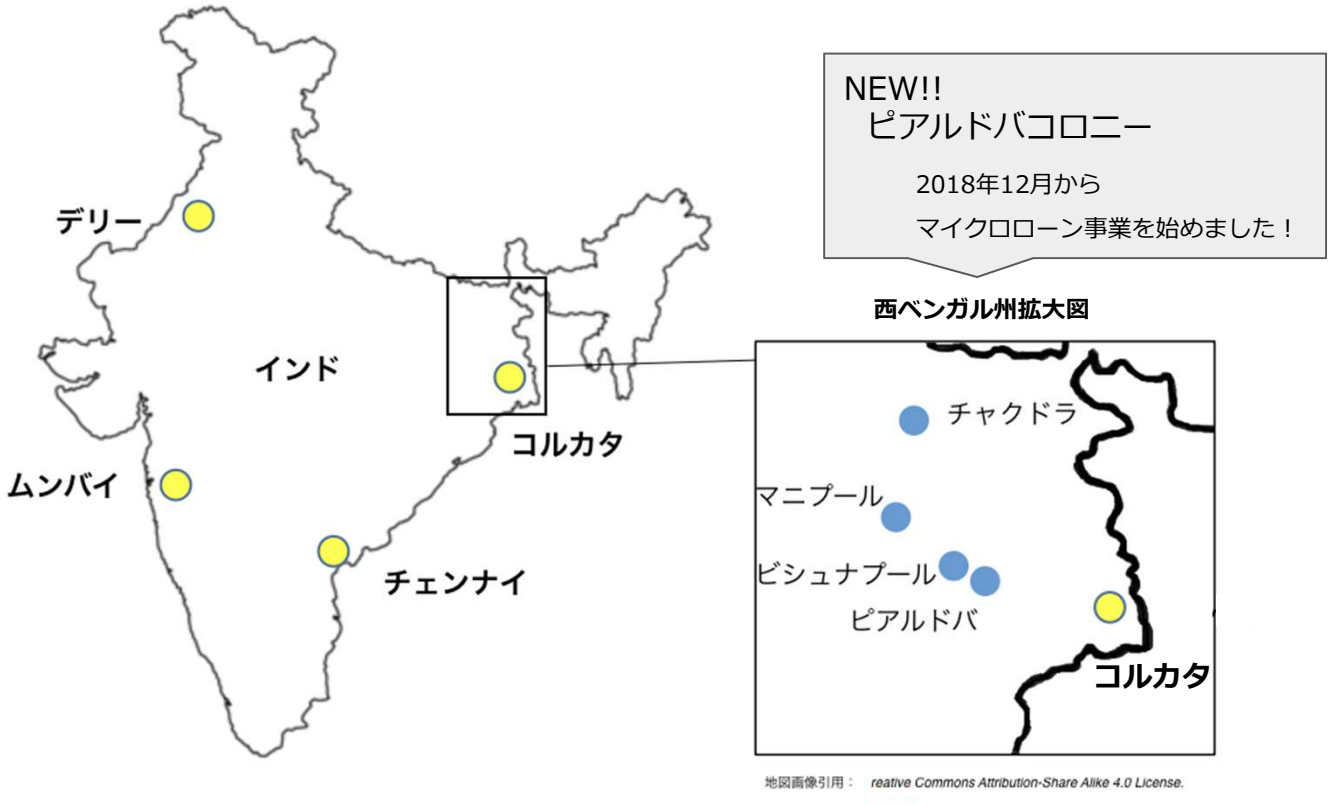
今後は、3月に参加した学生による報告会を各大学で実施したり、新たな大学にてプレゼンを行い、より多くの人にハンセン病、コロニーそしてワークキャンプについて知ってもらう機会を提供すると共に、新たな参加者を募り活動の安定化を図ります。

さらに、ワークキャンプという活動だけに縛られず、短期間でコロニーを訪問しアクティビティを行ったり、大学の制度を利用してインターン生を受け入れるなど、フレキシブルな活動を展開し多くの学生に参加してもらえる土台を作っていきます。

こうして多くの学生に参加してもらうことで、参加した学生を中心としてさらに活動が広がっていく。そして、参加した学生がコロニーでの経験を周囲に話すことで、ハンセン病問題に対する知識や理解が周囲にも広まっていく。その積み重ねが、ハンセン病に対する根強い誤解や偏見、差別を、そして社会を変えていく原動力になると考え、これからも活動に励んでいきます。

わぴねすが活動中のコロニー

インドは世界で一番ハンセン病の新規患者数が多い国であり、未だに年間12万人以上の人が発症しています。そんなインドには、一般社会から排斥されたハンセン病患者・元患者（回復者と呼ばれています）とその子孫によって形成されているハンセン病コロニーが、700ケ所以上存在しています。そこに住む多くの人々は、未だに続く差別と偏見の中で、非常に貧しい生活を送っています。わぴねすは現在、インド西ベンガル州にある4つのハンセン病コロニーにて活動中です。



インドのハンセン病コロニーの現状

コロニー近隣
Rs.9,000
（日本円で約14,400円）

ハンセン病コロニー
Rs.2,450
（日本円で約3,920円）

世帯収入/月間
2016-2018にわぴねすの活動コロニーにて調査

お金がなく教育を受けられなかった。そのせいで安定した仕事に就くことができないでいる。（30代　男性）

自分には後遺症があるので、未だにどこに行っても誰も自分の隣には座りたがらない。（50代　女性　回復者）

コロニー周辺でも職場でも、「ハンセン病コロニー出身だから」というだけで悪口を言われる。（10代　男性）

ピアルドバコロニー

設立経緯としては珍しく、政府によって作られたコロニーで

居住地や農業などの仕事が与えられています。

22世帯、70人が住んでいます。

差別状況 **悪** ○○○○● **無**	以前はチャイ屋に自分用のカップを持参しなければいけなかったり、水浴びが一緒にできないなどの差別があった。現在は政治家の運動により、周辺住民ととても良好な関係を築いている。
就労状況 **悪** ○○○●○ **良**	物乞いの村人はいない。しかし、政府のマンゴー農園で働いている村人が多く、その収入は暮らしていくのにやっと。2019年1月から始まった当団体のローン事業により、収入に大幅な変化がもたらされている。
居住環境 **悪** ○●○○○ **良**	イギリス軍の駐屯地跡地に暮らしている。どれも古いもので、雨漏りをしている家がほとんど。半壊した建物などは牛舎にするなど工夫して使用している。

好きなことを職に！　収入が倍に！　マイクロローン事業

この事業は2018年度より新しく始まった事業です。ピアルドバコロニーでは、元々物乞いで生計を立てている人はいなく、皆何かしらの職を持って働いています。しかし、収入は約3,000ルピー/月（約4,800円）ととても低く、日々の生活を送るのがやっとの状況でした。そんな中でもお金をどうにか工面して牛を購入したり、養鶏事業を始めている人がいました。そのお金どうしたの？と聞くと、高利貸しから借りた、と。とても高い金利でしたが、それでもまだまだお金を借りて事業を始めたい人がこのコロニーにはたくさんいました。

そこで当団体から資金を提供し、事業を始めてもらえないかと考え、ローン事業の立ち上げが決定しました。現在貸し出しているローンは16件、総額140万ルピー（約224万円）となっています。ローンを利用して事業を始めた人の中から、これまでの倍以上の収入を新しい事業で稼いでいる人も出てきています。

ローンを組んで養鶏場を始めたネパールさん

ローンの申し込みをするソンジーブさん一家

「この事業のおかげで村のみんながやりたい職に就くことができている。ありがとう」

装飾業　ソンジーブさん

「パーティー用のテーブルや椅子などのレンタル業をしているが、前は所有している物の数が少なくて、売上が限られていた。時には数が足りなくて、別のところから借りることもあった。だけど今はローンで新しく購入したからその必要はないし、収入も月に3,500ルピーから8,000ルピーと、２倍以上に増えたんだよ！」

ビシュナプールコロニー

42世帯、120人の村人が暮らすコロニーです。

わぴねすの活動により居住環境が大きく改善しつつあります。

差別状況 悪 ○ ○ ● ○ ○ 無	当団体の活動や世の中の変化によって、近年差別は減りつつある。 しかし、就労時や学校において差別をされることがまだある。
就労状況 悪 ○ ● ○ ○ ○ 良	未だに半数以上の人が物乞いで生計を立てている。2016年からきのこ栽培トレーニング事業、2018年1月からTOTOレンタル事業という2つの就労支援事業を開始したことで、19世帯の収入を増加させることができている。
居住環境 悪 ○ ● ○ ○ ○ 良	家屋の修繕や、井戸の補修などを続けてきた結果、生活環境は改善されつつある。しかし、井戸がシャワー代わり、トイレは近くの林、と他にも課題は多く残っている。

「これでもう、雨漏りに怯えなくてすむ！」

19軒の家屋修繕

2018年度は、2回のワークキャンプを通して19軒の家屋修繕を行いました。以前は雨漏りがひどく家の中で寝られないような状態の家もありましたが、修繕の結果、約32人の住民が雨漏りのしない家屋で安心して暮らせるようになりました。

開始して早2年！きのこ栽培トレーニング事業！

2018年度

これまで冬季シーズンのみ実施していたきのこ栽培ですが、今年度は夏季シーズンのきのこ栽培にもチャレンジしました。2018年度は例年を超える猛暑だったことと、また現在利用しているきのこ栽培小屋が小さく、外気温の影響を受けやすかったことから、夏季シーズンのきのこは上手く育ちませんでした。冬季シーズンにおいては安定した栽培、収穫ができるようになってきたため、通年でのきのこ栽培を可能にすることが目標です。

現在のきのこ栽培小屋

12世帯

12世帯がこの事業により収入を得ています。

2019年度は・・・

2018年度の反省を生かし、夏季シーズンのきのこを栽培できる施設の建設を行います。施設はコロニー内に建設予定のため、これまでと同じように栽培に取り組むことが出来ます。また、現在利用している栽培小屋と比べ、大きさが4倍程度の施設となるため、事業参加者へ支払うことが出来る金額も大幅に増やすことが出来ると想定しています。将来的には新しく建設する施設に2階部分を増設し、地域で一番のきのこ栽培工場を目指します。

収入が倍以上に！！　TOTOレンタル事業　始動

　この事業もローン事業と同様に2018年度から始まった新事業です。TOTOと呼ばれる電動三輪自動車を当団体が購入し、ハンセン病コロニーに住んでいる人々へレンタルし、ドライバーとしての職を得てもらうというものです。現在はビシュナプールコロニーに住んでいる7人が当団体からTOTOを借りてタクシー業を行っています。

　参加者7人の内、5人は元々サイクルリキシャと呼ばれる自転車タイプのものでタクシー業を行っていましたが、TOTOドライバーになってからはこれまでの4~5倍ほどの収入を得られるようになっています。ドライバー達が稼いでいるのを見て、他にも「自分もTOTOを借りたい」と言ってくる人もいるほどです。ただ、TOTOの故障（バッテリーの不具合）が頻繁に起きているため、次回TOTOの購入をする際は別のメーカーのものを検討予定です。

新しいTOTOに乗るモドゥさん

ロビー　カリンディさん

「今はTOTOがあるおかげで、
以前よりもいい暮らしができている。」

「TOTOの運転は、元々していたリキシャ引きよりも時間と労力がかからないうえに、一度に何人も乗せることができるからたくさんお金を稼げる。昔は毎日休まず働いても月に4,000ルピーしか稼げなかったが、今では20,000ルピーも稼げるようになった！もっと働いてお金を貯めて、新しい家を建てたり、子供にいい教育を受けさせてあげたい！」

2019年度、家屋修繕の完了と就労支援のさらなる飛躍を！

長年続けてきた家屋修繕ですが、2019年度をもって全ての家屋の修繕が完了する予定です。また、今後は家屋の不足問題に着手し、家屋の新築を実施する予定です。家屋が抱える問題が解決したのちには、より公共性の高いワークに取り組んでいきます。

加えて2018年度に大きく拡大し、成果をあげている2つの就労支援事業をさらに発展させ、コロニーの人々が安定した収入を得られるように、また、さらなる収入の向上を見込めるように継続的な支援を続けていきます。

雨漏りがしない、安心して住める家へ

マニプールコロニー

人口1,000人規模の比較的大きなコロニーです。

コロニーの中には高齢の回復者を保護する施設や、

ハンセン病回復者の子供・孫を保護するための児童養護施設などがあります。

差別状況 **悪** ○ ○ ○ ● ○ **無**	近年、目に見える差別は減りつつある。差別を受けることなく、大学へ進学出来た者や、一般企業・公務員として働くことが出来ている若者もいる。しかし、2019年春キャンプに行った調査によって、未だに近隣の一部の村人から「悪口を言われる・避けられる」といった差別を受けていることが発覚した。
就労状況 **悪** ○ ○ ● ○ ○ **良**	これまでの差別や貧困から、30代以上はまともな教育を受けていない人が多く、そのために、未だ物乞いやごみ拾いをして生活している人が多い。
居住環境 **悪** ○ ○ ● ○ ○ **良**	バラックのような家、土でできた家、セメントのしっかりした家など、世帯数が多いため家庭によって状況がかなり異なる。土でできた家は徐々に減っていっている。

公共施設やその運営システムに様々な変化が・・！

三者間ミーティングの様子

ゴミ処理システムの構築

2018年8月のキャンプにて村長ダス氏、当団体の梶田及び日本人学生メンバーの三者間ミーティングを開催し、マニプールにあるゴミ収集場の運営方法を決定しました。今後当コロニーで実施する就労支援に絡める形で、ゴミ収集場を継続的に運営できるようにしていきます。

Old Age Home Hostelの修繕

2018年夏のキャンプにて、Hostel（子供達の生活する児童養護施設）の男子寮を、2019年春のキャンプにて、Old Age Home（回復者の保護独居老人施設）の女性棟、合計2つの施設の修繕を行いました。

修繕されたHostelの外壁

2019年度、Old Age Home男性棟・スタッフルームの修繕

女性棟に引き続き、雨漏りやひび割れの被害があるOld Age Homeの男性棟及び施設のキッチンエリアなどの修繕をワークキャンプにて実施します。

また、コロニーの周辺に住む人々のハンセン病コロニーへの意識調査や、コロニー内の教育への意識調査を行い、コロニーと近隣の村々の関係性・コロニー内に住む村人の教育への意識を把握します。

Old Age Home

チャクドラコロニー

人口が16世帯、45人とこれまでの活動実施場所の中では

小さなコロニーです。

2018年春よりワークキャンプ活動が開始されました。

差別状況 悪 ● ○ ○ ○ ○ 無	近隣住民や職場の同僚などから、日常的に差別されている状態。しかし、ワークキャンプ時に開催するパーティに近隣住民が来てくれるなどの変化も見られ始めている。
就労状況 悪 ● ○ ○ ○ ○ 良	男性は季節労働（レンガ工場勤務）を行っているが、仕事がない時期もあるため収入が安定しない。女性や高齢者は物乞いで生計を立てており、得られる金額は非常に少ない。働いていない村人もいる。
居住環境 悪 ● ○ ○ ○ ○ 良	雨漏りがする、水が床からしみてくるなど、ほとんどの家屋が問題を抱えている。また、電力が十分に供給されていない、安全な水を手に入れられる設備がないなど、家屋の状態以外の問題も山積みである。

初訪問から1年、ついに本格的な活動が開始！

近隣住民への聞き取り調査

2018年夏キャンプにて、コロニーに対する差別の正確な状況やコロニー周辺の生活状況を把握するために、近隣住民に対する詳細な聞き取り調査を実施しました。

調査を実施している様子

レンガを積む作業を手伝うキャンパーたち

1軒の家屋の新築

2019年春キャンプにて、村内で一番状態が悪く、倒壊の恐れがあった家屋1軒の新築を行いました。2018年春に活動を開始してから初となるインフラ整備でした。

2019年度、まずは居住環境の整備を

2018年に引き続き、緊急性の高い家屋から順に修繕を行い、村人が安心して家に住むことができる環境を整備していきます。最終的には、コロニー内の全家屋の修繕を行う予定です。

また、コロニーで実施するパーティに周辺住民を招くことでコロニー内外の交流を図り、それぞれが持つ差別・被差別意識の解消を目指します。

ワークキャンプにて
修繕予定の家屋

2018 TOPICs

講演会の実施

・山形県最上地区社会科教員の研修会
・Startup Lady Japan 主催
「Women Entrepreneur Night vol.8 女性起業家　交流会」
・（公財）人権教育啓発推進センター主催の写真展 トークイベント
「ハンセン病を考えることは、人間を考えること。」

以上3つのイベントにて総勢92名に対し、講演を行いました！

山形における講演会

国内療養所 訪問

静岡県御殿場市にあるハンセン病国立駿河療養所にて、FIWC（フレンズ国際ワークキャンプ）のメンバーと共にミニワークキャンプを実施しました。入園者の方との交流を中心とした、年末イベントの実施や農業体験、梅酒づくりなどを行いました。参加者が活動を通してハンセン病やワークキャンプについて考えを巡らせ熱く語り合う、そんな時間を過ごしています。

参加しているキャンパーに質問！

Q. 療養所を訪問する上で一番大切にしていることは何ですか？

A.　駿河に通っていて感じるのは、「ハンセン病という背景を抱えた人々とどう関係を作っていくか」ということです。「ハンセン病について教えてください！」というスタートから入ることを否定はしませんが、それでは永遠に「ハンセン病」という壁を越えられないように思います。だからこそ、今は時間をかけて日常を共に過ごす中で「この人なら話してもいいだろう」と思ってもらえるくらいの関係を作りたいと考えています。傲慢かもしれませんが、一対一の関係を作るところから始める、ある種当たり前の人間関係の在り方を療養所でも模索し続けたいと思います。

(筑波大学　国際総合学類　4年　村松翼さん)

学生メンバーによる名古屋大学での啓発活動

名古屋大学の教養科目・国際開発学を受講している学生約120名（主に学部1年生）に、実際にインドに行った学生メンバーが90分間のプレゼンテーションをしました。
プレゼンテーションでは、ハンセン病への差別やその現状、またワークキャンプという方法でのアプローチとはどのようなものかを伝え、最後に学部1年生に向けて、挑戦してみることの大切さを伝えました。

社会人キャンプ開催！

コロニーの子供と交流するお二人

2019年3月には2回目の社会人ワークキャンプが開催され、理学療法士の宮崎さんとソーシャルワーカーの鶉さんが日・印大学生との合同のワークキャンプに参加されました。活動中には、韓国でのワークキャンプ経験をお話いただいたり、日本のハンセン病事情などのレクチャーの実施、また訪問したマニプールハンセン病コロニーでは潰瘍のケア方法などを現地ケアマネージャーや患者本人に指導するなど、お二人の専門を活かした活動が実施されました。

わぴねすなう！
～2019年3月よりインターン生が参加！～

2019年3月からわぴねすにインターンとして参加しています！！

毎日のブログの更新、SNS管理・運営、就労支援事業の管理・運営、インド人学生ワークキャンプなどの仕事を中心に頑張っています。

実はこのアニュアルレポートも、私たちが構成やレイアウトを考案しました！

筑波大学　人文学類　3年　八木咲良

ここまで半年間インターンに参加し、やっとインドに慣れてきたところです。NPOのインターンと聞いて、外にガンガンいくような活動を想像していましたが、現実はもっと地味です。しかし、このような日々の地味な積み重ねが、団体や活動の糧になっていることを痛感しています。このインターンに参加したからこそ、気づくことができました。また職員やインド人との関わりの中でいろんな思想に出会えました。たくさんの刺激をもらい、自分や人生、生き方について考えさせられました。あと半年間、いいことを全て吸収する勢いで、頑張っていきます！

筑波大学　国際総合学類　4年　渡部由佳

インターンが始まった当初はインドという環境の中で生きていくのに必死な毎日でしたが、やっとその生活にも慣れ、できることが少しずつ増えてきました。想像していたよりもずっと地道で大変な活動をしているのだと実感しています。しかし、村人が笑ってくれる、生活の変化を嬉しそうに話してくれる、そんな瞬間が私にとってはこの上ない幸せであり、そのために今こうして自分がわぴねすの活動に深く関わっていられることがとても嬉しいです。残り半年のインターン、今までよりもっと、いい意味で貪欲になって活動に邁進していきたいと思います。

代表挨拶

梶田　恵理子

インド・ナグプールにて仏教徒の社会的地位向上に50年以上尽力し続ける、インド仏教徒の最高指導者　佐々井秀嶺上人との会談にて

今年度は就労支援事業部の躍進もあり、収入の大幅向上など目に見える成果を上げることができました。加えてとても嬉しかったのは、OBOGから『就職しても関わりたい』という言葉の数々をもらったこと。職員など決まったメンバーだけでなく、希望者が参加できる風通しのよい団体にもっとしたいなぁとちょうど考えていた矢先のことでした。

わぴねすの理念は、「あらゆる人々がいきいきわくわく生きることのできる社会」を創ることです。それは、コロニーの人々だけでなく、関わる人々も含めた人類皆です。社会人だから学生だからといったことに囚われず、より多くの人々が活動を通して喜びを感じられる団体にすることが、社会全体をいきいきわくわくしたものにするために必要不可欠だと考えるからです。

そのためにも来年度は、積極的な講演会の実施や、より多くのインド人学生の参加促進など、喜びの輪を広げる一年にしたいと思っています。
今年一年、大変お世話になりました。来年度もどうぞよろしくお願い致します。

NPO法人わぴねす団体概要

正式名称　特定非営利活動法人わぴねす

代表理事　梶田恵理子

会員数
- つくば支部 65名
- 名古屋支部 7名
- Visva Bharati University 4名
- Bankura University 6名

WEBサイト
- NPO法人わぴねす
  https://wappiness.org
- インドワークキャンプ団体namaste!
  （ワークキャンプ事業部の日本人学生によるサイト）
  https://namaste.wappiness.org

協力団体　Pyari Foundation-India Trust
NGO FPSA

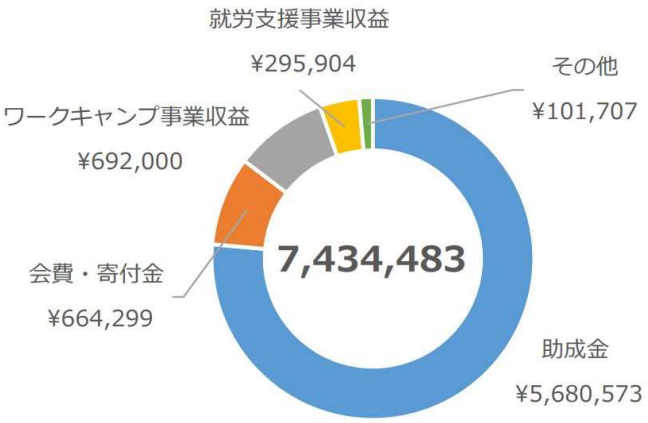
ご支援いただいた団体（敬称略・順不同）
- 公益財団法人　笹川保健財団
- アジア生協協力基金
- 梅本記念アジア歯科基金
- 一般財団法人　ひろしま・祈りの石国際協力交流財団
- フェリシモ地球村の基金
- 日蓮宗あんのん基金

活動内容　マイノリティの社会的地位の向上及び尊厳の回復を目的として、
インドハンセン病コロニーにてハンセン病問題解決のために活動を行なう。

2018年度　収入

2018年度は2017年度に引き続き、助成金、寄付金・会費などが堅調に伸び、昨年の2倍近い収入となりました。しかし、収入の大半が助成金に頼っているという状況です。

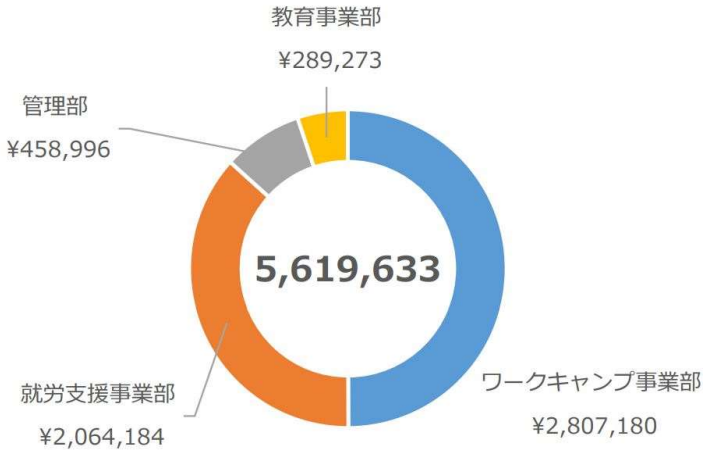
2019年度は、寄付金や助成金の獲得にもこれまで通り注力していきますが、事業収益の向上にも力を入れてまいります。新たな就労支援事業としてTOTOレンタル事業やローン事業といった収益事業も始まったため、2019年度はそれらの事業収益が増加する予定です。



2018年度　支出

2018年度はワークキャンプ地が1箇所増えたことと、老人用施設の修繕といった規模の大きいプロジェクトがあったためワークキャンプ事業部の支出が昨対比で2.5倍ほどになっています。

2019年度は3箇所のコロニーでワークキャンプを開催予定であること、就労支援事業の拡大、西ベンガル州のコロニー調査事業を受託していることなどにより2018年度の2倍近い支出を予定しております。



支援方法

クレジットカード

右記QRコードを読み取り、
HP上にて手続きをお願いいたします。

銀行振込

銀行名	ゆうちょ銀行
口座名義	特定非営利活動法人わぴねす
支店名	二〇八（ニゼロハチ）
預金種目	普通
口座番号	0538244